

【ポスター発表】

「地域記憶」の地域回想法ツールとしての活用可能性

—地域住民を対象とした上映会の評価—

○日本福祉大学 伊藤 美智予 (4726)

キーワード3つ：地域回想、「地域記憶」、地域住民

1. 研究目的

熊本県 A 村において、被災地コミュニティの再構築の一環として「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムを展開してきた。「地域記憶」とは、地域住民から収集する写真等をもとに編集する地域住民の生活の変容を示す映像（スライドショーDVD）である。①準備（制作委員会の組織化など）②写真データ等の収集、③写真データ・音源等の選定、④制作、⑤活用、⑥評価の過程からなり、地域住民や行政などとともに制作する。

このような「地域記憶」を紡ぎ出す作業プロセスは、住民間の交流促進につながったり、地域への愛着を高めたりすることが考えられる。また成果物としての「地域記憶」は、地域住民や介護サービス利用者の回想法、小中学生への地域教育での活用も期待できる。

今回、地域介入プログラムを経て「地域記憶」が完成し、地域住民を対象とした上映会を実施した。本研究では、上映会でのアンケート調査を通して、「地域記憶」の地域回想法ツールとしての活用可能性について検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

「地域記憶」の上映会に参加した地域住民 36 名を対象とし、アンケート調査を実施した（回収率 100%）。2021 年 4 月に上映会を開催した（約 90 分）。コロナ禍であったため密とならない参加者数の設定とし、感染防止策を徹底したうえで実施した。制作委員会メンバーを中心に「写真を集めて語ろう会」の参加者らに声をかけた。また介護サービス事業所や行政の協力も得て、地域住民の参加を呼びかけた。上映会終了後にアンケート調査を行い、1) 属性、2) 「地域記憶」制作過程への参加状況、3) 満足度、4) 参加したことによる影響（4 項目）、5) 今後の参加意向、6) 今後の活用法、7) 参加した感想について尋ねた。3) ～5) については 5 件法で回答を求め、6) 7) は自由記述とした。

3. 倫理的配慮

本研究は、対象者に対して、研究の趣旨、個人を特定できる情報を収集しないこと、学会や学術雑誌等に発表すること、アンケートの提出をもって同意とみなすこと等を書面で説明し実施した。日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

(1) 属性

「男性」が約半数であった。「70代」が半数、「80代」1割弱、「60代」が約3割を占めた。居住年数では「生まれてからずっと」が4割弱で最も多かった。

(2) 「地域記憶」制作過程への参加状況

「上映会のみ参加」が約半数、「写真を集めて語ろう会に参加」が25%、「制作委員」が約14%、「その他」が1割弱であった。

(3) 満足度

「とてもよかった」69.4%、「まあよかった」22.2%、「普通」2.7%で概ね肯定的だった。

(4) 参加したことによる影響（図1）

「地域の当時の生活や文化について、次世代に伝えていきたいと思うようになった」「地域への愛着が高まった」「懐かしい気持ちになった」で評価が高かった。

(5) 今後の参加意向

「とてもそう思う」61.1%、「まあそう思う」26.1%と肯定的評価であった。

(6) 今後の活用法（一部抜粋）

「サロン活動で使用したい」、「老人会等で地域の先輩方にみていただきたい」「小学生や中学生に見せたい」「子どもや孫たちと一緒に見たい」などの意見が挙げられた。

(7) 参加した感想（一部抜粋）

「あの時代を過ごせたことを誇りに思う。あの頃があるから今がある。パワーが出た」、「忘れていた子どもの頃を懐かしく思い出した。小学校の先生や知り合いを見て胸が熱くなった」、「物が無い時代、何事も近所で助け合い行動していたことが懐かしかった。昔ながらの人と人のつながりを残していきたい」など昔を懐かしむ声が寄せられた。「写真をきっかけに思わず会話・対話が始まること、そこで語られる内容に価値がある」「地域の歴史がよくわかる記録映像だった」「この地域を大事にしていきたい」などの意見もみられた。

5. 考察

本調査結果に基づけば、「地域記憶」の地域回想法ツールとしての有用性が示唆された。「地域記憶」を用いた回想法は地域を切り口とした記憶の想起であり、地域での共通の体験・記憶に着目した取り組みである。地域の良さを再確認し、地域への愛着が高まる機会となっていた。今後、介護サービス利用者を対象とした回想法ツールとしての活用可能性を検討していきたい。（本研究は文部科研（課題番号 18K02144）の助成を受け実施した）

